

## 第6章 インドネシア地方政治における汚職と司法

岡本 正明

### 要約：

民主化・分権化後のインドネシアでは汚職が大きな問題となっており、日々、マスメディアを騒がせている。本稿では、その中でも派手なスキャンダルとして注目を浴びたバンテン州の州知事一族の汚職に着目する。その一族が地方政治経済を牛耳った過程を振り返ったあと、汚職撲滅委員会が州知事と弟を逮捕した過程、彼らによる汚職の実態を明らかにする。そして、司法機関が機能不全に陥っている中で、地元のNGOの地道な活動と汚職撲滅委員会の高度な自立性が彼らの逮捕につながったことを示す。

### キーワード：

インドネシア、汚職、バンテン州

### はじめに

2009年総選挙のとき、ユドヨノ大統領率いる民主主義者党の選挙広告の一つは、「(汚職には)ノーと言おう」というものであった。その広告で汚職にノーと言っていた同党党首アナス・ウルバニルム、幹部で元ミス・インドネシアのアンジェリーナ・ソンドク、スポーツ担当大臣のアンディ・マラランゲンらが2012年と2013年に汚職容疑で次々と捕まった。アンジェリーナ・ソンドクには12年の懲役と5億ルピアの罰金刑が下っている。2004年総選挙の頃から「反汚職の聖戦」を掲げ、他政党よりも清廉であることを売りにし続けていたイスラーム主義政党、福祉正義党でも、2013年に党首ルトウフィ・ハサン・イスハックが汚職容疑で逮捕され、15年の懲役と1.5億ルピアの罰金刑がくだされた。さらに、同年10月に、憲法裁判所長官アキル・モフタルが収賄容疑で現行犯逮捕された。アキルの前任のマフッド長官の頃までは憲法裁判所は、インドネシアの民主化の象徴であり、世界的にも高く評価されていただけに、アキルの逮捕はインドネシア中に衝撃が走った。

彼らを逮捕したのは、独立した司法機関である汚職撲滅委員会である。同委員会によれば、2004年から2013年末までに容疑者・被告人となった国会・地方議会議員の数は73名にのぼる。また、閣僚級11名、大使4名、州知事10名、県知事・市長35名、政府高官114名、裁判官・検察官9名も容疑者・被告人となっており、合わせれば396人にのぼる (Antara News 2014.1.9)。同委員会

が扱う事件は、国家機構が関与する 10 億ルピア以上の汚職事件に限られる。10 億ルピア以下の汚職も含めてみれば、中央、地方を問わず、汚職はインドネシアで常態化していると言ってよいであろう。

32 年間続いたスハルト権威主義体制が 97 年に始まるアジア通貨危機のあおりを受けて 98 年 5 月に崩壊した時、反スハルトに立ち上がり「改革」(Reformasi) を目指した人々のスローガンは「汚職・癒着・縁故主義」の廃絶であった。スハルト体制が崩壊して民主化が始まって 16 年が経った今、政治は安定して経済成長は実現できているけれども、汚職についていえば、改善から程遠いというのが実情である。さらに地方に目を向けてみれば、ジャカルタ州知事ジョコ・ウィドドのような革新的地方リーダーが現れてくる一方で、経済エリートとの癒着を通じて利権の独占を目指す地方ボスのような存在が目立つ。「改革」で廃絶が謳われていた縁故主義も目立つ。内務省地方自治総局長ジョヘルマンシヤは、524 の県知事・市長のうち 61 の首長が前首長の親族であると指摘している (Satelitpost 2013.12.5)。こう考えてみれば、政治体制が権威主義体制から民主主義体制に変容したとはいえ、「汚職・癒着・縁故主義」ということについていえば、地方に関する限り、かなりの継続性があると指摘する声があるのもうなずける。その改革の見込みはあるのであろうか。このことをバンテン州を事例にして考えてみたい。同州の事例は、家産制支配の頂点にいた州知事とその弟が憲法裁判所長官とともに逮捕された事例であり、司法と汚職を考える上で格好の材料である。

## 第 1 節 家産制支配の典型自治体：バンテン州

スハルト体制崩壊後、もっとも露骨に地方を一族で治めることに成功してきたのは、ハサン・ソヒブの一族であろう。2001 年に西ジャワ州から分離した形でバンテン州ができると、彼の一族が要職を握っていった。自らは同州商工会議所会頭、土建業者連合州支部長、その他経済界の要職などについた。そして、政界には一族を進出させた。言うまでもなく、もっとも重要なのはバンテン州知事ポストであった。州議会が正副州知事を選ぶ最初の州知事選が 2002 年に行われた時には、最初の妻との間に生まれた長女アトゥットを副知事にすることに成功した。アトゥットとペアを組んで州知事になったジョコが 2004 年に汚職容疑をかけられると、2005 年にアトゥットが州知事代行に就任した。そして、2007 年に行われた州知事選にアトゥットは出馬して勝利を収めて州知事になることに成功する。2012 年の州知事選に再出馬して勝利して、現在、アトゥットは 2 期目に入っている。

長女アトゥット以外の一族も次々に政界進出をしていった。州都のあるセラン県の副知事にはハサンと最初の妻の間に生まれた次女タトゥが就いた。また、長男ハエリ・ワルダナ、通称ワワンはバンテン州ゴルカル党青年部部長に就いていた。その妻アイリンは、タンゲラン県知事選に副知事候補として出馬して敗北した後、南タンゲラン市長選に出馬して勝利し、市長になっている。アトゥットの夫ヒクマットはゴルカル党から国会議員になった (2013 年死亡)。アトゥット

とヒクマットの間にできた長男アンディカはバンテン州選出の地方代表議会議員になり、その妻ロッシはセラン県議会議員になっている。

2人目の妻との間に出来た長男ハエルル・ジャマンは、2007年に新設されたセラン市にて2008年から副市長を務め、2013年には市長選を制して市長になっている。長女リリス・カルヤワティはゴルカル党セラン市支部長、その夫アデン・アブドゥル・ハリクはバンテン州議会議員である。3人目の妻との間にできた子どもたちは商工会議所や土建業者連合で要職を握っている。5人目の妻ヘリヤニは同州南西部にあるパンデグラン県議会議員を務めた後、2011年から同県副知事になっている。6人目の妻ラトナ・コマラサリはセラン市議会議員を2013年まで務めた（Gatra 2013.10.16: 26）。

2011年6月にはついにハサン・ソヒブが84歳で永眠したことで、一族支配の終焉が噂された。しかし、表看板には女の州知事アトゥットを立て、その実弟ワワンが実際のキングメーカーとしてすべてを取り仕切る形で後継問題を乗り切った。ワワンがハサン・ソヒブの後継者であることを象徴的に示したのは、ハサン・ソヒブが長年務めてきたバンテン州商工会議所会頭のポストを引き継いだことである。ハサン一族によるバンテン州の政財界支配に対して不満は広がっていたけれども、2013年までは誰もそれを崩しうるとは思っておらず、権力の頂点にあったと言える。

民主化、分権化後、インドネシアには「ミニ・スハルト」が各地に生まれたと言われたが、それはスハルトのような権力者が地方に生まれたことを意味し、支配の態様まで似ているという指摘ではなかった。しかし、民主化、分権化から15年近くが経ってみると、このバンテン州の事例を典型とするように、スハルトの家族が政界にも経済界にもものし上がってきた90年代のように、実態としてもスハルトの支配を髣髴とさせるところも出てきている。

こうした家産制支配が可能になったのは、民主化・分権化以後の話であり、スハルト体制時代には、地方で一族支配を実現することは不可能であった。スハルト体制は地方に自立性を与えないように、多様な民族からなる島嶼国家インドネシアを統治したからである。集権的な財政をとり、スハルトの意向に沿った首長に地方統治を任せた。天然資源が豊かなリアウ州やカリマンタン各州の場合、地元出身ではなくジャワ出身の軍人が州知事となることが多かった。バンテン地方の場合、オランダ領東インドの時代からイスラーム神秘主義勢力、共産主義勢力、その両者の連合が反政府運動を起こしてきた。1945年の独立戦争の時代には社会革命が起きて、スカルノ初代大統領やハッタ初代副大統領が思いもしなかった形で既存の秩序が崩壊した。そうした政治的背景もあり、バンテン地方を州に昇格させる運動さえ認められなかった。西ジャワ州の一部に据え置かれ、同地方内の県・市の首長になったのは、大半がバンテン出身者ではなく、西ジャワ州の中心地方出身者のスダ人であった。民族的な外部者が五年の任期ごとに交代しながら統治することで一族支配が防がれてきた。

こうしたスハルト体制時代にハサン・ソヒブが有力者にのし上がることが出来たのは、彼が国家と地域社会の媒介者を買って出たからである。彼は、拳術に長け、暴力を重要なリソースとするジャワラと呼ばれるやくざ者を手下として数多く抱えていた。スハルト体制としては、強制的

に政治的安定を作り上げるに際し、反政府デモなどが起きれば、軍や警察を表立って動員するのではなく、ハサン・ソヒブの手下であるジャワラに対処させることが出来た。組織としては、政権党ゴルカルがスハルト体制と地域社会との媒介役を担い、地方の有力者を取り込むツールとなっていたから、ハサン・ソヒブはゴルカルでも要職を握った。そして、スハルト体制を積極的に支持する見返りにハサン・ソヒブは経済的利権を享受し、手下のものや一族に分配することができた (Okamoto and Hamid [2008])。

彼は、バンテン地方に駐屯する陸軍部隊や地方警察署とのリンク作り、ゴルカルを通じた中央政界とのネットワークをつくり上げることでバンテンでの権力基盤を確実なものとしていた。ただし、一族を政界に送り込むことはできていなかった。中央政府、そして西ジャワ州政府という二重の上からの統制が自治体の家産制化に歯止めをかけていたのである。せいぜいハサン・ソヒブができたことは、アトゥットやワワンなどの子弟を実業家に育て上げることであった。

民主化・分権化が始まると、上からの統制解除が進んだ。そして、地元意識が高まり、地元の人たち (Putra Daerah) が地元の政治経済の主役となり、地域開発の主体となるべきだという意見が強まった。こうした抽象論、理想論、総論では誰もがさして疑問を抱かないものの、実際に地元の人たちの誰が首長になり、商工会議所の会頭になるのかという具体的な話になると、結局は地方エリートの誰かということになる。そして、有力ポストの獲得を巡って地方エリート間で対立が発生した。バンテン地方の場合、地元意識の高まりは、西ジャワ州から分離してバンテン人が多数派となるバンテン州を作り上げる自治体新設運動となって現れた。バンテン人によるスンダ人支配への反乱という側面もあった。60年代に同様の運動が起きたときには中央政府が反対したため失敗したが、今回は成功した。中央政府が自治体増加に反対をしていない状況で、バンテンの地方エリートが中央政府、西ジャワ州政府にロビー攻勢をかけ、地元住民を動員した示威行動をしてバンテン州誕生にこぎつけたのである (岡本 [2005])。州の新設に伴って作られた州知事ポストやその他さまざまなポストの担い手をめぐる争いが起きたものの、結局、州政府関連のポスト、州のビジネス連合関連のポストはほぼハサン・ソヒブとその関係者が掌握することに成功した。

バンテン州商工会議所や土建業者連合の州支部長には自らが就任する一方で、ジャワラを含む手下のものをそうした支部の要職や他の同業者連合州支部の要職につけた。そして、州政界の支配に乗り出した。ただし、政治ポストについては、手下のものではなく、一族郎党を送り込むようになった。一族支配の始まりである。一族には政治家がいなかったことから、もっとも重要な州知事など首長の選挙においては、一族を副首長候補として送り込んで政治学習をさせた。2001年に初めて行われた州知事選では、長女アトゥットを副知事候補に擁立した。当時の首長選は州議会での投票であったから、ハサン・ソヒブは州議会での多数派工作、州議会議員への金のバラマキとジャワラによる脅迫によってアトゥット副知事誕生に成功する。

その後、先述のように、アトゥットの妹タトゥはセララン県の副知事になり、異母弟ハエルルはセララン市の副市長になり、ハサン・ソヒブの妻ヘリヤニはパンデグラン県副知事になっている。

アトゥットの義理の妹アイリンは、タンゲラン県知事選に副知事候補で出馬した。この選挙では負けたが南タンゲラン市長選で勝利してアイリンは南タンゲラン市長になった。こうして本格的な州及び州内の県・市支配を始めていくにあたり、2005年から首長選が地方議会での投票ではなく直接選挙になったことから、暴力の行使や脅迫は政治リソースとしてマイナス要因となり、選挙資金とイメージが重要な政治リソースとなった。ジャワラの政治的重要性は下がった。ハサン・ソヒブの一族が正副首長ポストに妻や娘など女性を据える傾向にあるのは、このイメージ選挙に勝利する狙いがあった。

ハサン・ソヒブによる盤石な政治経済支配が完成するかと思われた2011年に彼が亡くなってしまう。しかし、継承争いが起きることなく、アトゥット・ワワン体制が樹立した。アトゥットは女性の州知事として母親らしさをイメージとして打ち出しつつ、ゴルカル党本部財政副部長として中央政界とネットワークを持ち、ワワンは経済界のネットワークを堅固なものとしていった。実際のところ、アトゥットにはさほど行政能力も政治力もなく、ワワンがすべてを取り仕切っているというのが一般的な見方であった。州議会には、9人の侍・チームなるものがあり、ワワンの会社が州政府のプロジェクトを獲得できるように暗躍していた。ワワンはバンテン州の行政にも強い影響力を持ち、州高官人事には彼の承認が必要であった（*Gatra* 2013.11.6. 22; *Suara Pembaruan* 2013.10.19）。それゆえ、ワワン体制もまた父親の体制と同様に盤石と思われただけに、ワワンとアトゥットの逮捕には衝撃が走った。

## 第2節 ワワン、そしてアトゥットの逮捕

2013年10月2日午後10時、汚職撲滅委員会捜査チームは、憲法裁判所長官アキル・モフタル、ゴルカル党国会議員ハイルン・ヌサ、中カリマンタンの鉱山経営者コルネリス・ナラウを長官公邸で逮捕した。そして、280,450 シンガポールドル、22,000 米ドルの入ったカバンを押収した。続いて、中ジャカルタのホテルにて、中カリマンタン州グヌン・マス県の県知事ハンビット・ビンティを逮捕した。また、同じ頃、自宅にいたワワン、ルバック県に向かう途中だった弁護士スシ・トゥル・アンダヤニを逮捕し、ジャカルタにあるスシの両親宅から10億ルピアの入ったカバンを押収した。そして、入国管理局に対して州知事アトゥットの出国禁止を求めた。この一連の逮捕と出国禁止は、グヌン・マス県とルバック県の県知事選をめぐる裁判結果を左右させることを目的とした贈収賄に絡むものである。グヌン・マス県の県知事選では、次点で敗れた候補が同県選挙管理委員会と県知事ハンビットを相手取り、彼らが大規模かつ体系的に選挙違反を行って勝利を収めたと憲法裁判所に訴えていた。ハンビットとしては、憲法裁判所が敗者の訴えを聞き入れて再選挙になることを恐れていた。再選挙をすれば負ける可能性もあり、また、勝利したとしても選挙コストがバカにならないからである。そこで、憲法裁判所が敗者の訴えを退けるように、アキルとコネクションのあるハイルン・ヌサを通じて、ハンビットはアキルを買収しようとしたのである。

一方、バンテン州ルバック県の県知事選では、現職県知事の息子オクタビアが勝利をし、アトゥットやワワンの支持するゴルカル党推薦候補アミル・ハムザが敗北した。アミル・ハムザ側は、同県知事選においてオクタヴィアが父親の影響力を利用して大規模かつ体系的に選挙違反をしたと憲法裁判所に訴えた。弁護士にはスリを立てた。スリは、アキルの弁護士事務所で働いたことがあり、アキルへのアクセスがあったからである。実際、アキルが憲法裁判所の裁判官になってからは、同裁判所で係争中の首長候補たちがアキルへの接近手段として競って近寄ってきていた。アキル逮捕の前日の10月1日、憲法裁判所は、アミル・ハムザ側の訴えを受け入れて、県知事選のやり直しを命じていた。ワワンはスリを通じてその判決への謝礼を渡そうとしていたのである<sup>1</sup>。

アキルについては、憲法裁判所の判事となってから黒い噂が絶えず、汚職撲滅委員会は、9月6日にはアキル捜査を始めていた。その2週間後に、ハンビットによる贈賄情報が入った。10月1日にはルバック県知事選やり直し決定が出た。それゆえ、汚職撲滅委員会は、金銭の授受の現場で現行犯逮捕すべく準備を整えていた。ルバック県知事選について言えば、ワワンが汚職撲滅委員会の捜査線上に浮かび上がってきていた (*Tempo* 2013.10.13: 34-38)。

では、この汚職撲滅委員会はこういった組織なのであろうか。同委員会は2003年に発足した独立委員会である。汚職がはびこる司法機関では政府機関の汚職撲滅はできないという判断でこの委員会は発足した。同委員会は、国家機関が関与する10億ルピア以上の汚職事件に対して、警察、検察と並んで捜査、取り調べ、起訴を行う権限を持ち、捜査段階では通信傍受も行うことができる。その強大な権限もあり、同委員会が取り扱った事件の被告全てが有罪判決を受けるという驚異的な成果を上げている (Bambang Widjojanto [2013])。そのため、汚職撲滅委員会に逮捕されたワワン、アトゥットにも有罪判決が下る可能性が極めて高い。

2014年1月、汚職撲滅委員会は、ワワン宅の家宅捜索での押収物をもとに南タンゲラン市及びバンテン州の総合病院への医療機器納入においてマークアップを行った容疑でも逮捕した。さらに、この二つの事件において、ついにアトゥット州知事も逮捕された。つづいて、同年2月20日、アキルの裁判において、ワワンとアトゥットがアキルに対して総額750億ルピアの支払いを行っていることが判明した。2011年10月に行われたバンテン州知事選でアトゥットは勝利したものの、敗北した候補が憲法裁判所に対して選挙結果に異議申立てを行っていた。ワワンとアトゥットは、この申し立てを却下してもらおうべく、ワワンの会社からアキルの妻の会社への支払いという形でワワンの手下により7回に分けて送金が行われたことが、アキルへの裁判で明らかになった (suaramerdeka.com 2014.3.6)。

---

<sup>1</sup> ちょうどこの頃、ワワンの妻であり南タンゲラン市長であるアイリンは、ハーバード大学におけるインドネシア地方リーダー（県知事・市長、地域開発計画企画庁長官）への研修プログラムに出席するためポストンにいた。同プログラムは、インドネシアの大ビジネス・グループ、ラジャワリによる寄付金で始まったもので、選抜された優れた地方リーダーを対象としていた。夫の逮捕を受けて、アイリンは急遽、帰国した。

### 第3節 ハサン・ソヒブ一族の支配の実態

] ワワンとアトゥットの容疑に対しては、マネー・ロンダリングも含まれたことから、資産の差し押さえも始まった。この逮捕をきっかけに、一気にバンテン州における一族支配の実態がさまざまなメディアで暴かれるようになった。インドネシアの有力誌テンポ、ガトラ、フォルム・クアディランや新聞紙コンパス、コラン・テンポなどもセンセーショナルに書き立てた。

最初に述べたような一族による首長ポストや国会・地方議会議員ポストの掌握に加え、ワワンとその関係企業が公共事業を獲得できるように尽力する「侍・チーム」がバンテン州議会に存在し、主に予算委員会委員になっていること<sup>2</sup>、バンテン州や南タンゲラン市の公共事業局や保健局のプロジェクトを獲得するためのブローカーの存在が実名入りで記事になった。ハサン・ソヒブ一族の所有する有力企業のリスト、同一族に与する企業のリストも掲載された。

また、公開入札でありながら、バンテン州の公共事業でワワンたちが常に落札できるからくりも暴かれた。公共事業の入札にあたっては、表向きはウェブサイトで公開入札をしているように見えて、実態は操作されていた。普段はそのウェブサイトはダウンしていて、ある時期だけ復旧しており、ワワンとその関係者だけしか入札できないようにしていたのである。また、公共事業局の建設プロジェクトの落札状況を見れば、ワワンの土建会社、その仲間の土建会社が順番に落札していることが明らかであった。ワワンの土建会社が事業を実施するときの利益率は3割から4割という高率であり、彼の仲間の業者が事業をするときには事業費の2割を手数料としてワワンに払っていた (Gatra 2013.11.6a: 20-23)。

公共事業だけでなく、病院機材購入プロジェクトも利権化していった。病院機材は基準価格が操作しやすく、業者の言い値で購入しやすいためである。アイリンが市長を務める南タンゲラン市の保健所では、医師によれば病院機材の価格が市場価格の3倍もしていた (Tempo 2013.11.10b: 44)。

そもそも、こうした不適切な予算執行については、会計監査院も知るところであり、報告も上がっているが、何の措置もなされてきていなかった。メディアもそれまであまり報じてこなかった。選挙コンサルタント会社フォックス・インドネシアに努めていたウダイは、2003年の頃からバンテンの汚職問題を取り上げてきていた。ウダイなどからも情報をもらったインドネシア汚職ウォッチなどのNGOがデモなども繰り返していた。2013年になってようやく汚職撲滅委員会が動き始め、ワワンやアトゥットの逮捕となった。これを契機に、ウダイなどがかねてから集めていた情報がメディアに一気に流れていった<sup>3</sup>。

<sup>2</sup> この侍チームは、民主主義者党、民族覚醒党、福祉正義党、ゴルカル党、闘争民主党など主要な政党出身の議員から構成されている。

<sup>3</sup> ウダイとのインタビュー、2014年3月6日。汚職撲滅委員会がどうして2003年から10年後にようやくバンテン州の汚職に対処し始めたのかについてははっきりわからない。ハサン・ソヒブ一族とつながりのあるバンテン人が同委員会の要職についており、彼がバンテン州での汚職捜査に歯止めをかけたとも言われている。

ワワンやアトゥットの資産が押収されるにいたり、彼らの豪華な生活ぶりが知れ渡った。ワワンは、ジャカルタ、セラン、更にはシンガポールやオーストラリアにも家を持ち、200以上の土地証書を持っていた。ランボルギーニ、フェラーリ、ロールスロイスなど高級車を10台以上持ち、州議会の「侍・チーム」や若い女優たちもワワンから高級車をもらっていた。押収された車両数は2014年3月8日時点で58台とハーレーダビッドソンのバイク1台にのぼり、汚職撲滅委員会の駐車場を埋め尽くした (Antara News 2014.3.11)。アトゥットもまたジャカルタ、セラン、バンドンに複数の家を持っていた。テンポではアトゥットのクレジットカードの派手な使用ぶりが記事になった。ジャカルタのみならず、シンガポールなど海外にも出かけ、ルイ・ヴィトン、ヘルメスなど高級服飾店で買いあさり、1カ月に1億ルピア以上、5億ルピアを使うこともあった。支払いには自らではなく、誰かに行わせていたことまでわかっている (Tempo 2013.11.10a: 34-40)。

これほど露骨なハサン一族による支配と汚職でありながら、彼らに司法の手が及ばなかったのは、ワワンたちが検察や裁判所の地方支部を取り込んでおり、訴追はされても有罪にはならなかったからである。脅迫とカネが取り込む方法であった。直接選挙ではジャワラは目立たなくなったが、こうした場面で必要とされた。ハサン・ソヒブ一族に関わる汚職事件が裁判になると、担当検事に脅迫 SMS が届き、自動車のタイヤに穴が開けられ空気が抜かれ、そのために使われたドライバーがその場に捨て置かれているということが起きた。こうした脅しと同時にカネで懐柔するのである。その結果、複数の汚職事件の裁判では、バンテン州の高等検察庁が捜査中止命令 (SP3) を出して捜査が止まった。また、バンテン州警察で捜査が止まっているケースもある (Forum Keadilan 2014.3.2: 11-15)。

#### 第4節 汚職の解明と一族支配の終焉？

バンテン州で家産制支配が強化され、ハサン・ソヒブ一族の汚職が摘発されなかったり、捜査中止に追い込まれたりしてきたのは、同州の司法機関が機能不全を起こしているからである。汚職撲滅委員会の場合、腐敗している司法機関とは独立しており、また、地方に支部を持たず、ジャカルタから集権的に汚職を取り締まることができるゆえに、ワワンたちの汚職にメスをいれることが出来た。しかし、どこまでハサン・ソヒブ一族の家産制支配に裏打ちされた汚職の実態が明らかにされるのかは定かではない。地方エリートが多くが恩恵に預かってきただけに、彼らの抵抗もあるからである。

ワワンが逮捕され、アトゥットの逮捕が噂されていた2013年12月下旬、アトゥットの夫で死亡したゴルカル党バンテン州支部長選ヒクマットの後任を選ぶ同党州支部特別会議が開かれ、一票差でありながら、アトゥットの妹でセラン県副知事のタトゥ・ハサナが勝利を収めている。ワワン体制で恩恵を受けたゴルカル党の州幹部も多く、タトゥが敗れてワワン体制が完全に崩壊して数々の汚職が暴露されることを恐れているためだと思われる。

また、アトゥットの刑が確定して州知事を辞職すれば、現在の副州知事が知事に昇格して、州



議会が副州知事を選ぶことになる。その副知事候補としてタトゥを擁立する動きがある。州議会での選挙ゆえ、ワワンたちがカネと脅迫を利用して影響力を行使することはできる。

地元NGO「公共のための独立同盟」会長ウダイによれば、ハサン・ソヒブ一族を一網打尽にするには、憲法裁判所長官への贈賄事件や医療機器納入のマークアップの事件ではなく、州予算による無償支援金（Dana Hibah）の流れを解明することであるという。このスキームはNGOなど社会組織を通じて住民を支援するものである。2011年度に支援金を受領した組織は221あり、そのなかにはハサン・ソヒブの一族がトップを務める組織もあり、突出した支援金を受け取っている。例えば、アトゥット自らが会長を務める財団ダルシヨリハンに35億ルピア、アトゥットの妹タトゥがトップを務めるインドネシア赤十字バンテン州支部に9億ルピア、インドネシア協同組合委員会バンテン州支部に2億ルピア、アトゥットの夫ヒクメットがトップを務める地方工芸委員会バンテン州支部には7.5億ルピア、アトゥットの息子アンディカが州支部長を務める青年団バンテン州支部に15億ルピア、防災団バンテン州支部に17.5億ルピアといった具合である（Uday [2011]）。また、実態が伴わない組織もある。2013年度の支援金を受け取ったNGOには、予算上は200億ルピアを受領するはずが実際は4億ルピアしか受け取っていないと指摘するところもあった（Beritasatu.com 2014.2.3）。しかも、この支援金の使途は極めて曖昧である。ウダイなどは、このケースも汚職撲滅委員会が取り上げられることを期待していたが、同委員会の「人員不足」により、高等検察局が取り扱うことになった。2013年5月に着任した新バンテン州高等検察局長官は汚職撲滅委員会で働いたことのある人物であり、これまでのケースの見直しをすと語っている（Gatra 2013.11.6b: 19）。しかし、これまでの経緯を見れば、ワワンたちが検察に圧力をかける可能性は高く、この寄付金のケースについても検察が捜査中止命令を出す可能性がある<sup>4</sup>。

ワワンについては今のところ、検察は15年の懲役刑を求めている。仮に、ワワンに実刑判決が下って刑務所に入ったとしても、彼らのバンテンでの政治経済的影響力がすぐに弱体化する保証はない。タトゥなどが後継者になるだけでなく、ワワンの部下たちが忠誠心を持ち続けるのであれば、刑務所から彼らを通じて支配することも不可能ではないからである。映画のような話であるが、インドネシアでは可能である。

## おわりに

このバンテンの事例だけを見ても、民主化・分権化後のインドネシアにおける汚職の問題が根深いことが分かるであろう。インドネシアで民主主義体制が始まって16年、政治は安定して民主主義自体は定着したといえるけれども、汚職は減る気配がない。スハルト体制期と違って、汚職が表沙汰になっていることは評価できる。それでは、何ら解決の糸口はないのであろうか。今のところ、汚職撲滅委員会が極めて重要であり、この存続が汚職を阻止する装置として機能して

---

<sup>4</sup> ウダイとのインタビュー（2014年3月6日）。

いる。しかし、同委員会の強大な権限については、国会や司法人権省から不満が上がっており、これまで何度となく権限削減の試みがなされてきた。今のところ、メディアや知識人がすぐに反論を展開するので、この試みは阻止されてきている。仮に、近いうちに通信傍受などの権限が制限されていけば、バンテン州にかぎらず、汚職事件の捜査が困難となっていくであろう。それは地方の家産制の維持・強化を容易にし、汚職も拡大するであろう。司法機関改革が遅々として進まないなかでは、現状の権限を有する汚職撲滅委員会が存続する必要性は高い。

民主化・分権化が始まったことから、地域の市民社会が地方政府を監視してグッド・ガバナンスを実現することが望ましいことは間違いない。しかし、市民社会の代表といえる NGO のなかで、地方政府から自律的なものは多くない。先の無償支援金を受け取った 221 の組織にも多くの NGO が含まれている。98 年以後は海外のドナーがこぞってインドネシアの民主化支援のスキームを実施して、多くの NGO に支援を行ってきた。しかし、インドネシアでは民主制が定着し、海外のドナーも民主化支援のためのスキームを減らしてきており、NGO も存続のために地方政府のプロジェクト、プログラムに頼らざるを得ない状況になってきている。バンテンをみれば、ウダイの NGO やインドネシア汚職ウォッチなどが比較的自立している数少ない NGO である。10 年間に渡る彼らの活動も汚職撲滅委員会がなければ意味をなさなかった。そういうことからすれば、大きな運動にならずとも、地域社会での NGO の活動は不可欠であり、汚職撲滅委員会のように機能している中央政府の司法機関がその活動と連携を取れる体制が強固に樹立されることが地方政治変革の道であろう。これは長期的な課題であるが、必要不可欠なことでもある。

## 参考文献

新聞 (オンライン版を含む)

Antara News. 2014.1.9. PM 20:03. KPK alami tren peningkatan dalam pengungkapan kasus (<http://www.antaraneews.com/berita/413326/kpk-alami-tren-peningkatan-dalam-pengungkapan-kasus>) (アクセス、2014年2月20日午後2時30分)

Antara News. 2014.3.11. AM01:09. KPK sita enam truk Wawan (<http://www.antaraneews.com/berita/423295/kpk-sita-enam-truk-wawan>) (アクセス、2014年3月12日午後3時14分)

Beritasatu.com. 2014.2.3. 04:34. Terjadi Lagi, Kasus Pemotongan Dana Hibah di

APBD Banten (<http://www.beritasatu.com/nasional/164182-terjadi-lagi-kasus-pemotongan-dana-hibah-di-apbd-banten.html>) (アクセス、2014年2月22日午前11時31分)

Satelitpost. 2013.12.5. 61 Kabupaten/Kota Jalankan Politik Dinasti (<http://satelitnews.co/61-kabupatenkota-jalankan-politik-dinasti/>) (アクセス、2014年2月13日午後2時12分)

Suara Merdeka. 2014.3.6. 12:28. Jaksa beberkan peran Wawan suap Akil Mochtar (<http://www.suaramerdeka.com/v2/index.php/read/news/2014/03/06/193548/Jaksa-Beberkan-Peran-Wawan-Suap-Akil-Mochtar>) (アクセス、2014年3月6日午後5時15分)

Suara Pembaruan. 2013.10.19. Inilah Sepak Terjang Adik Atut dalam Memonopoli Proyek di Banten (<http://www.suarapembaruan.com/home/inilah-sepak-terjang-adik-atut-dalam-memonopoli-proyek-di-banten/43653>) (アクセス、2013年11月2日、午前10時20分)

雑誌

*Forum Keadilan*. 2014. 3. 2. Jaksa di Kotak Pandora Wawan. pp. 11-15.

*Gatra* 2013.10.16. Ujung Tanduk Dinasti Atut. pp. 25-27b.

*Gatra* 2013.11.6a. Dinasti Jawara Meraup Proyek. pp. 14-18.

*Gatra* 2013.11.6b. Feri Wibisono: Saya Akan Buka Perkara Mana Pun. p.19.

*Tempo* 2013.10.13. Akal-akalan Putusan Akil. pp. 34-38.

*Tempo* 2013.11.10b. Jejak di Rekening Bersama. pp.43-46.

*Tempo* 2013.11.10a. Ratu Banten di Butik Hermes. pp.34-40.

論文

<日本語文献>

岡本正明 [2005] 「インドネシアにおける地方政治の活性化と州「総督」の誕生ーバンテン地方の政治：1998-2003」『東南アジア研究』第34巻第1号 3-25 ページ。

<外国語文献>

Bambang Wijoyanto. [2013] “Anti-Corruption Law Renewal in Indonesia: Challenges and Opportunities (A Review of Law Reform of 1998-2012),” in the Proceedings of the International Seminar "Socio, Political and Economic Reform in Southeast Asia: Assessments and the Way Forward," held in LIPI on March 10, 2013 under JSPS Asia Core Program.

Okamoto, Masaaki and Abdul Hamid. [2008] “Jawara in Power, 1998-2007,” *Indonesia* No. 86: pp.109-138.

Uday, Suhada. [2011] *Analisis Lanjutan Aliran Bantuan Hibah Provinsi Banten Tahun Anggaran 2011*. Menes:n.p.